

名古屋大学部活・サークル実態調査：国際化に向けて

国際教育交流センターアドバイジング部門

坂田 亜紀・柴垣 史・後藤 知美

名古屋大学留学生の部活・サークル活動参加への問い合わせが増加する一方で、加入や継続的な活動への課題は多い現状がある。本調査は、本学の部活・サークル活動や留学生の受入れ状況の現状把握、及び、留学生の参加に関して部活・サークル団体（以下団体）と留学生の双方が期待する大学からの支援を検討するため、昨年度より継続して実施している。昨年度の調査では、団体が懸念するのは言語などの表層的なものであり、多様な文化の存在を認めるものの、留学生が日本文化に合わせることを期待する傾向にあることがわかった。また、留学生と関わる度合によって、受入れへの意見が大きく異なることがわかってきた。

【留学生対象オンライン調査】

今年度は、団体への対面インタビューの継続及び“地獄の細道”（新入生勧誘イベント）や名大祭等の情報収集を予定した。さらに、留学生への調査実施により部活・サークルへの参加状況や必要とする支援を把握し、必要な情報発信へと進める予定であった。新型コロナウイルス感染症拡大により、イベントでの情報収集は困難となったため、まず留学生を対象としたオンライン調査を実施した。昨年度の団体へのオンライン調査と同様、留学生担当教職員や各留学生会に周知協力の依頼をした。計41名の回答があり（大学院生66%、学部生20%、研究生8%、研修生3%、交換留学生3%）、日本の大学の部活・サークルの存在は知られていることがわかった（知っている83%）。参加状況については、現在や過去に参加（28%）、今後参加してみたい（62%）、参加に興味がない（10%）であった。活動参加の良い点は、興味関心がある活動に参加でき、日本人を含め友人が作れる場であるとの回答が多かった。難しい点として、学業との両立や言語の違い、日本人学生とのコミュニケーションという回答であった。留学生の公認／非公認団体の認識については曖昧であることもわかった。参加や継続への必要な支援としては、英語を含む資料や情報の提供、言語を含むコミュニケーションのサポート等の回答があった。

【留学生対象インタビュー調査】

オンライン調査で協力したいと回答した10名の内4名を対象に、各約1時間30分のインタビュー調査を行った。昨年度より本調査に協力している学生スタッフ2名を雇用し、日本語または英語、オンラインまたは対面の希望を聞いて実施した。主な質問項目は、母国での部活・サークル活動の状況、来日後の具体的な活動経験や交流の様子、その際に感じたことや困ったこと、必要な支援の具体例や提案等であった。少数ではあったが、学内外における課外活動への参加に意欲的かつ経験もあり、語る内容が豊富であった。コロナ禍で人と話す貴重な機会となったことにも感謝され、双方にとって有意義な時間となった。

留学生プログラムが実施できず、来日も困難であり、来日できたととしても部活・サークル活動を含めた課外活動や交流ができない状況の中、インタビュー数は増えなかった。

【学生スタッフへのインタビュー調査】

本調査計画の再検討の結果、本部門スタッフが、前述の学生スタッフ2名と、留学生の受入れや来日後のサポートを行なう事務担当者2名へのインタビューを実施した。

学生スタッフ2名は、RA（レジデントアシスタント）活動や学内外における国際活動経験があり、本学の部活・サークルの特徴や留学生の傾向、留学生の参加・継続への課題、双方に必要な支援、また、本学の国際化に関する課題や提案等が上がった。チューター制度を部活・サークルにも取り入れて共に活動しやすくする案や、同じ授業を履修する仕組みが正課外活動にも繋がるのではないかな等の提案もなされた。総合的に、留学生への活動参加に関する情報が圧倒的に少なく、団体への連絡方法等の情報が得にくい現状があることがわかった。

【事務担当者へのインタビュー調査】

事務担当者2名へのインタビューでは、留学生への部活・サークル活動に関する情報提供、留学生からの

問合せ状況についてを主な質問項目とした。情報提供に関しては、新入生オリエンテーション時（春・秋学期）に、大学公認団体のリストを配付し、また、主に新入生のサポートをする学生団体を紹介しているとのことであった。事務室窓口においては、部活・サークル活動に関する問い合わせ件数は少ないが、対応したケースでの回答においては、特に日本語が不自由な学生が自ら必要な情報を探すことが難しく、配付する団体リストから辿る情報の更新がない場合もあり、活動現況や加入条件など、アドバイスしたい担当者も有用な情報へ辿り着けず、サポートも限定的にならざるを得ない状況がうかがえた。留学生の活動への加入状況例として、個人の学生の直接的仲介が、サークルへの加入、活動継続に寄与していたケースがあったとのことである。事務担当者の要望としても提供可能な有用情報が増えることの他、留学生を受け入れる側の意識の変化を促すことも含め、部活・サークル活動に限らず、より多くの交流が芽生える機会が増えて欲しいということがあがった。

【今後の課題】

正課外活動は、多様な学生が学び合い、交流する機会を創出する貴重な場である。留学生にとっては、学業や研究目的外で興味のある活動に参加し、日本人学生と交流できる場であり、留学生活への適応を助ける重要な経験となろう。団体への支援としては、主体的活動を尊重した上で、留学生の参加が想定できるよう丁寧かつ地道な働きかけが必要であろう。また、団体が提供する既存の情報や企画等をできるだけ活用しながら、留学生の入学前後における部活・サークルの基本情報の提供を整備し、どの学生にも同じ情報が届けられると良いと考える。国際化が、特別な場所や機会への参加のみを意味するのではなく、日本人学生か留学生かを問わず全ての学生を対象として行なわれるよう、支援を模索していきたい。

プロジェクトメンバー：和田尚子、後藤知美、坂田亜紀、柴垣史（アドバイジング部門）、木村健吾（工学研究科）、塚田麻美（人文学研究科）（2021.3現）